
放課後の教室

律花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後の教室

【著者名】

律花

【あらすじ】

勉強はできるけれど、ちょっと冷めたところのある中学一年生の植木駿。ある日、放課後の教室で、偶然同じクラスの三森早希と会つ。おとなしい彼女の「家に帰りたくない」という言葉が気になり、次第に存在を意識するようになるが……

「おまえ、ほんと食うの遅いなあ。もつとぱつぱと食えないわけ？」
西村がいつものように、三森に向ひよつかいを出す。だけど、三森はなんの反応も示さない。視線さえ上げずに、のんのんと弁当のおかずを食べている。

班のほかのメンバーはとっくに昼食を終えて、違う班のやつのところへ遊びに行ってしまった。

女つてことを差し引いても、三森はほんとうに食べるのが遅い。一口ひとくちがすくなくて、その上味わうみたいにゅつくりと咀嚼するから、なかなか弁当箱の中身が減らない。

西村が三森の食べ方をからかって、おかしそうに笑っている。席替えでいまの班になつてから、すっかりおなじみの光景。三森が毎度口をつぐんだきり、なにも言ひ返さないから、西村はますます図に乗るんだろう。

僕は机に頬杖をついて、そんなふたりを横目に見ていた。
ちよつとは言い返せばいいのに、つて頭の片隅で思つ。だけど同時に、そういうことができないやつもいるつてことは、ほんやりとだけ理解している。

小学校のころから、クラスにひとりはいた。おとなしくて、なにを言われても黙つてうつむいているだけで、なんとなくこつは馬鹿にしてもいい、みたいな雰囲気ができ上がつているやつ。

このクラスでは、三森がそういうポジションつてことなんだろ？
実際、西村と同じよつな、テンションが高くて頭の軽い男子に、よくからかわれている。

三森がやつと、弁当を全部食べ終わつた。それとほんと同時に、昼食時間の終わりを告げるチャイムが鳴つて、クラスメイトはばらばらに自分の班へ戻つていつた。

終礼が終わると、教室が一気に騒がしくなる。授業が全部終わつた開放感のせいか、みんな昼休みの数割増しくらいの勢いで友達としゃべり出す。うしろの席の海斗に背中をつつかれて、僕は後ろを振り返つた。

「なあなあ、塾の英語の宿題つてもうやつた？」

「やつた。つていうか、英語つて今日じゅん。まだやつてないわけ？」

別にめずらしくもないことだけど、ちょっと呆れてみせる。すると、机の上のスクールバッグに両腕を預けながら、

「午後の授業中、やるつもりだつたのに寝ちゃつてさあ
梶谷の授業眠すぎ、子守唄だろあれ、と海斗がだるそうにぼやく。
もう、この先にくる台詞は想像がついている。

「つてわけでさ、またノート見せてよ。帰り、ジューースおじるし」
やつぱり、案の定だ。僕ははいはい、と適当に声を返して立ち上がり、それからスクールバッグを肩にかける。教科書やノートの半は机の中に残しているから、全然重くない。

「いいけど、とりあえず帰ろうよ。ノート家だし」

「さすが、前から思つてたけど駿つていいやつ」

調子のいいことを言いながら、海斗がぴょんと席を立つ。
それを確認して、僕はドアのほうに足を向けた。

一車線の車道沿いに伸びる歩道を歩く。学校の先生の悪口とか、クラスのやつから聞いたうわさとかを、海斗と話しながら。

「そういや、聞いた？ 佐藤が山本に告つたつてよ」

「ほんとに？」 で、どうだったの？」

「瞬殺、だつて。だよなー。佐藤も最初つから期待してなかつただろうし」「うし」

半分あきれて、半分同情していのよつた笑いを浮かべて、海斗が言つ。

確かに、妥当な結果だつて思つ。かわいくて話も面白い山本と、地味で動作のとろい佐藤じや、どう考へても釣り合はない。

「けど、なーんかくじけるよな。おれも告りたいけど、びつせふられんだろうなー」

急に海斗が落ち込んだ表情になつて、深いため息をついた。

「神谷のこと？」

「そつそつ。神谷つて正直、すげえかわいいし。うわーおれ、明らか不釣り合にじやね？」

海斗はひとりで話を完結させると、「あー」だか「うー」だか分からぬ声を上げて嘆いた。それから、いきなり僕に話題を振つてくる。

「駿は相変わらず、好きなやつとかいないわけ？」

「いないよ、そんなの」

隠しているわけじやなくて、ほんとうにいなかつた。

女つてなんか陰険なやつが多いし、変なところで怒つたりわめいたりするからややこしいし、わざわざ付き合ついたいなんてまったく思わない。だから、「クラスの女子で、彼女にするなら誰がいいか」なんてくだらない話題で盛り上がれるクラスメイトの気持ちも、ぜ

んぜん分からぬ。

クリーニング屋の脇にある自販機で、僕たちは缶コーヒーを一本買つた。もちろん、僕の分は海斗のおごりだ。

プルタブを引いて、中身を一気に半分くらい飲み干す。夏休みが開けて間もなく、まだまだ空氣に暑さの名残がある時期。身体に冷たさが行き渡つてゆく感じが気持ちいい。

「本気で、女に興味ないわけ？ うそ言つてねえ？」

そう言つて、海斗がほとんど空になつた缶を軽く振る。中でコーラのはねる音がした。

「ないつての。つていうか、うちの姉ちゃんと一寸つじょにいたら、女とか絶対無理つて感じになるから」

「おまえの姉ちゃん、そんなひどいのかよ」

「うんひどいよ、と笑いながら、姉ちゃんのことを脚色も込みで話す。

それを聞いて、海斗はおかしそうに笑い転げていた。

海斗と別れて住宅地を進み、家に着く。いつもより、スクールバッグから空になつた弁当箱を取り出そつとして、僕は思わず舌打ちをした。

学校に、弁当箱を置き忘れてしまつたらしく。

僕は大きくなつた息をついて、手ぶらで外に出た。そして、ついさつき通つた道を、ふたたびたどり始めた。

3 放課後の教室

正門を抜けて校庭を突つ切り、僕は校舎に入つた。

下駄箱でスニーカーをはきかえて、一階につづく階段をのぼる。みんな部活に行つたか帰宅したみたいで、誰ともすれ違わない。ざりざりと、上履きがコンクリを擦る音だけがひびく。

ドアを開け、教室に足を踏み入れる。

そのまま自分の席に向かおうとしたとき、窓際に立つうしろ姿が目に入つて、僕は立ち止まつた。

三森だ。

三森がゆつくりと、こいつちを振り返る。そして、まるで僕の存在が本物かつて確かめるみたいに、数回まばたきをする。

しばらく視線がぶつかつて、先にそらしたのは僕のほうだった。自分の席に向かい、机のフックにかかつた弁当袋を取る。

「弁当箱、忘れちゃつて」

無言で立ち去るのも微妙だから、ついでのよつて声をかけた。

三森がはつとしたように、弁当袋を持つ僕の手元を見る。すこし視線を落とし、どこかぼうとした様子でつぶやく。

「…… なんだ」

「三森はなにしてたの？ こんなところで」

僕の何気ない問いかけに、細い肩が怯えたようにはねた。そして、かすかに唇が動く。この場にふさわしい言葉を探しこねたように口をつぐんで、それからやつと、消えてしまいそうな声で答えた。

「なにも、してない」

正直、すこしく反応に困る返答だつた。話題を膨らますことさえできやしない。まあ、三森にはそもそも会話をつづける気がないのかもしれないけど。

なにそれ、と愛想笑いを浮かべて、僕はきびすを返した。これ以

上、この気まぐい空氣に堪えられそうになかった。

ドアの引き手に手をのばしたそのとき、独り言のよくな声が耳に届いた。

「帰りたくないかったの」

思わず、僕は三森のぼつを振り返った。三森が伏し目がちに、もう一度繰り返す。

「家に帰りたくないて……だから、残つてたの」

言葉の内容とは裏腹に、その表情は悲しそうでもさみしそうでもなかつた。なんの感情も浮かんでいないように、僕には見えた。

僕は話しかを忘れたみたいに、ただその場に立ち尽くしていた。三森のすぐうしろの窓は開け放たれていて、そこから流れ込む風が、肩下まである髪を揺らしていた。

塾に向かつて、自転車をこじぐ。ペダルを踏みながら、頭に浮かぶのはなぜか、窓辺にたたずむ三森の姿だった。

自転車置き場に自転車を止めて、玄関ドアを開ける。すれ違った講師にあいさつして、夕方から開放されている自習室に入った。先にきて最後列に座っていた海斗が、僕に気づいて片手を振つてくる。

「駿、ノートノート」

僕が隣に腰を下ろすやいなや、海斗がそう催促してくる。わかるよ、とかばんから英語のノートを出し、海斗に渡した。

「待つてる間に片付けときやいこの」

僕のつぶやきに、海斗がへへつと笑う。

「駿の解答のほうが確実じやん。駿、超頭いいし」

まあ、そう言われて悪い気はしない。ちなみにこいつ見えて、海斗もそこそこ勉強ができるんだけど。

海斗がシャーペンを手に、ノートを写しあじめる。その様子を眺めているうち、またさつきの出来事が頭をかすめた。三森が、ぽつりと洩らした言葉。

家に帰りたくないって、なんただろう。親とけんかでもしてるんだろうか。

「なあ、さつき偶然、三森と会つたんだけどさ」

海斗がシャーペンを動かしたまま、つづきを促す。

「そんで？」

「家に帰りたくないとか言つてたんだけど、なんでだと思う？」

僕がそうたずねると、海斗はがくっと大げさに机の上に突つ伏した。すぐにむくりと起き上がりつて、声を上げる。

「なんこと知るか。親とけんかでもしたんじやね？ それか、かてーのじじょー的な理由」

家庭の事情。

たぶん適当に言つたんだろうけど、その言葉にはなんだかリアリティがある気がした。

「三森ってなんか、わけありっぽくね？ 親に暴力振るわれるとか、普通にありそつじやん」

いつもおどおどしていて、ほとんど声を発しない三森は、僕たちは異質な人間のように思えることがある。単におとなしいだけじゃなくて……まとつている雰囲気が違うっていうんだろうか。つかみどけるのない感覚を、うまく言葉にできない。

ただ、海斗も僕と同じ印象をいだいていて、だから「わけありっぽい」なんて言い回しをしたんだってことは分かる。

「なに？ 三森のこと、氣になるわけ？」

海斗がにやにやしながら言つ。

「別に。なんとなく聞いてみただけ」

そつけなく返して、僕は腕時計を確認した。角張った数字は六時半を示していた。

三森は、もう家に帰つたんだろうか。別に心配しているわけでも、あるのか分からない「家庭の事情」に首を突つ込みたいわけでもないけど、ほんのすこしだけ、心に引つかかつた。

「駿、ちょっとスーパーで、卵と豆腐買つてきてくれない？」
日曜日、ソファに寝転がつて漫画を読んでいたら、台所から母さんの声が飛んできた。

「えー……自分で行きやいいのに」

「手が離せないのよ。今日の夕飯、なくてもいいの？」

そんなことを言われたら、行くしかない。

母さんからかばんを受け取つて、僕はしじぶしじぶ家を出た。

いまにも雨の降り出しそうな空の下、財布と折りたたみ傘の入ったかばんを手に、駅前のスーパーへ向かう。だるいなあ、と心の中でぼやきながら。

スーパーに着いた僕は、陳列棚の間をぶらぶらと歩いて、頼まっていたものをプラスチックかごに入れていった。ついでにと、自用のお菓子をその中に忍ばせてやつたりもした。

そうして、買い物を終わらせて、レジへ向かう途中。

調味料が並ぶ棚の前に、僕は私服姿の三森を見つけた。

棚の前にしゃがみこんでいた三森は、小瓶をひとつ手に取ると、かごに入れて立ち上がった。それから歩き出そうとして、やつと僕に気づいたらしく、動かしかけていた足を止めた。

「買い物？」

いい話題が見つかなくて、なんだか当たり前な質問をしてしまう。三森はおずおずとうなずいて、植本くんも？ と聞き返していく。うん、と僕が答えたのを最後に、会話が止まつた。こんな状況、前にもなかつたつけ？ 確か以前教室で会つたとき。

もう三森も買い物が終わつたみたいだつた。ここで別行動するのも変だし、自然とふたり揃つてレジに向かうことになる。

会計を済ませて商品を袋に詰め、僕たちはスーパーの外に出た。墨をにじませたみたいな空は、かるうじて持ちこたえてくれていた。歩道をたどる僕の数歩うしろを、三森がついてくる。僕との距離をはかりかねているような、そんな感じ。帰る方向が同じなんだろうけど、ちょっと気まずい。

「それ、重くない？」

振り返り、三森の持つてこるビニール袋を目で示して、僕はたずねた。いっぱいになつた袋は、一リットルの飲料が入つてたりして、かなり重さがありそだつた。

「あつ……ううん、全然、大丈夫」

ふるふると、三森が何度もかぶりを振る。

そこまで必死に否定しなくとも、とほんやり思つ。大きな袋は小柄な身体に不釣り合いで、あきらかに手に余つてゐるよに見えるだけ。おまけにもう一方の手も、水色の傘でふさがつてゐる。

「持つよ」

なにも持つていない右手を、僕は差し出した。

「いっ、いいよ……いつも自分で持つてるから、慣れてるし……」

「そんないつも、ひとりで買い物してるわけ？」

気になつてたずねると、三森は恥ずかしそうにうつむいて、肩を縮めた。

「うち、親がふたりとも働いてて、忙しいから……よく、私が買い物してるの」

そばを通りの車の走行音に紛れて、小さく、ほんとうにしゃべつぶせられた声に、僕は海斗との会話を思い出していた。

かてーのじじょーつてやつ？

でも、親が共働きしてゐやつなんて、友達にもたくさんいりし。別にめずらしい話でもない。

「とにかく、慣れてても重いものは重いだろつ。貸せよ」

僕は強引に、三森の持つてこる袋を奪い取つた。三森は驚いたようすを見開いて、なにか言おうとして……ぎゅっと唇を噛んだ。

「……ありがとう」「その声はかすかに震えていて、薄い影の落ちた顔は、いまにも泣き出しそうに見えた。

スーパーで会つて以来、なんとなく三森のことが気になるようになつた。西村にからかわれているところを見ても、以前ならなんとも思わなかつたのに、最近はつに海斗としゃべつているふりをしながら、耳をそばだしてしまう。

ある日、社会科のグループ発表に向けて、班ごとにリーダーを決める機会があつた。まあ、そんなものは当然誰もやりだがらないわけで、みんなでお互いの反応をうかがう状態になつてしまつた。

「三森でいいんじゃね？ どうせ、リーダーとかやつたことねえだろ？」

西村が笑いながら言つたのは、そんなときだつた。

班全員の目が、三森のほうを向いた。どう考へても、三森は場を取り仕切つたり、大勢の前で発表をしたりするのには向いていない。みんな分かつていながら、口を挟まなかつた。ただ、顔を見合せて苦笑いするだけ。

なにか言つて、自分に白羽の矢が立つのがいやだつたからだ。

三森はじつとうつむいていた。自分には意見する資格なんてないつて、思つてゐるみたいだつた。

「おれがやるよ」

いてもたつてもいられない氣分になつて、僕は名乗りを挙げた。リーダーなんて面倒なこと、やりたくなかったはずなのに。なんで自分から率先して飛び込んでしまつたのか、分からない。

場はそれでスムーズにまとつた。みんながほつとしたような笑顔で、僕に感謝してくる中、三森だけが相変わらず黙り込んでいた。とても申し訳なさそうに手を伏せて、まるで痛みをこらえるみたいに。

月末になると席替えがあつて、三森とはすこし席が離れてしまった。でも、教室の後方にある新しい席から、教室全体を見通すことができた。教室の中程の席にいる三森のことを、僕は授業中や休み時間、ふとした瞬間に見ていた。

三森は基本的にいつもひとりだつたけれど、たまに山本とか柏木とか、クラスでも特別ひとなつっこいやつに話しかけられていた。三森が誰かとしゃべっているところを目にするとたび、僕はもどかしさに近い感覚をいだいていた。

なにを話してるんだろう？

耳を澄ませても距離が邪魔して、三森の小さな声は聞き取れない。ここから見えるのはうしろ姿だけで、顔さえ分からない。

笑っているんだろうか。それとも、緊張して、こわばった表情をしているんだろうか。

想像してみたところで、それを知るすべなんて、僕は持ち合わせていなかつた。早希ちゃん、つて親しげに話しかけることのできるあの女子よりも、僕と三森の距離は遠かつた。

「駿、なにぼーつとしてんだよ。帰ろうぜ」

海斗の声に促されて、僕は教室のドアに向かつた。

途中で一度、自分の席を振り返る。すこし迷つたあと、なにも気づかなかつたふりをして、ふたたび足を進めた。

7 ふたたび教室で

家に着いた僕は、適当な頃合いを見計りつてまた家を出た。車道沿いの道を進んで、学校に着く。

校舎に入つて階段をのぼり、教室のドアを開ける。

どれくらいの期待をかけていたのか、自分でも分からない。ただ、はつきりしているのは、三森があの日と同じ、誰もいない教室の窓辺にたたずんでいたことだった。

三森が振り返る。二つを見つめる田が、とまどいに揺れている。僕はゆつくり自分の席に向かつと、机の横にかかつた弁当袋を手に取つた。

「また、弁当忘れた」

そう言つて苦笑いすると、不安げだった三森の表情がゆるんだ気がした。

「三森は、今日も残つてたんだ」

「……うん」

「家に帰りたくない？」

今度は息を殺したような沈黙が返つてくる。

三森の様子をうかがつたあと、僕は思い切つて、ずっと氣になつていたことをたずねた。

「三森つてさあ、親と仲悪いの？」

三森が小さく息を飲む。そして、僕からさりちからなく田をそらして、弱々しい口調で答えた。

「そんなこと……ないよ。けんかとかも、全然しないし
相変わらず口数がすくなくて、ひとを拒絶するような態度を見せ
る三森。」

僕は言つべき言葉を失つて、黙り込んだ。
分からなくなつていた。

わざわざ、忘れ物したふりなんかして、僕はなにをしたかったんだろ？

窓の外から聞こえてくる運動部のかけ声が、場違いな感じで耳にひびく。この前の放課後よりも涼しい風が、三森の髪をなびかせる。ふいに三森がこつちに視線を戻し、そしてやつと、「質問への回答」じゃない言葉を僕に向けた。

「ずっと言えなかつたけど……」この間はありがとう。リーダー、やつてくれて」

「いいよ、あんなの。つていうか西村のあれ、あきらかに嫌がらせじゃん」

先日のコーダー決めのときの出来事を思い出して、あきれながら言ひ。

すると、三森はなにも言わずにいつのまにしてしまつた。あまり触れられたくないことだつたのかもしれない。やつちやつたかな、とちよつと後悔する。

「まあ、適当に聞き流しあけばこよ。あんなのに付か合つてたら、時間の無駄だし」

「くだらない、つて一笑するよ」僕はやつ言つた。

「ん……そうなのかな」

三森が小さく首をかしげて、自分に言い聞かせるみたいにつぶやく。

「んなときにふきわしいのがどんな表情なのか、僕には分からない。ただ、この二かにもつて感じのまじめな顔をするのは、なんだか違う気がして。」

「そうやつ。別に三森が悪いことしたわけじゃないんだしさ」だから僕は、適当っぽくて、軽い感じの笑みをつくつた。それが三森の耳に、じつ映つたのかは分からぬけれど。

「……うん」

三森がこくんと小さくうなづく。

それから、その唇がかすかに動いて、だけど、やつぱり声にはな

らなくて

代わりに大粒の涙が、白い頬を伝い落ちた。

あ、と三森が小さく声を洟らす。自分が泣いてるのだと気づいて、自分でも驚いたつていつぶつ。「三森はあわてて目元に手をやつた。ぱりぱりぱりぱれる涙を、強引にぬぐう。

僕はなにがなんだか分からなくて、ただ黙つてその様子を見ていた。張り詰めていた糸が切れたみたいな、そんな泣き方だつて思つた。

「なんで」

やつとのじとじ、僕はのどから声を絞り出した。

「なんで、泣くんだよ」

「……分かんない」

そう答えて、三森は顔を上げた。もう涙は止まっていたけれど、こすった目の下が赤くなつていた。

「あのね、私……ほんとは、買い物なんか行きたくない。晩ご飯だつて、つくりたくない。三人分つくつても、食べるときはいつもひとりで……誰も食べてくれてなくて、朝、そのまま残つてることもあつて」

堰を切つたみたいに三森が言つ。また泣き出しちつになるのを、ぎつぎりのところで踏みどじまつている感じだ。

「ひとりで家にいるのが、怖いの。お父さんもお母さんも、いつも帰りが遅くて……私のこと、忘れやつたんじゃないかつて思つちやつて、すごく怖い」

さつきまで泣いていたせいで、すこし鼻にかかつた声。まだ目じりもちよつと濡れている。

正直、僕には三森の気持ちがよく分からなかつた。買い物なんてせいせい、母さんに頼まれたときに嫌々行くくらいだし、晩ご飯を

自分でつくったことだって一度もないし。ひとりでいる怖さなんてものも、全然感じたことがない。

だから、その場しのぎな慰めの言葉はかけたくなかつた。それはまるで、上つ面だけのきれいごとを押し付けるおとなみみたいで、ひどく偽善者っぽく思えた。

「事情は、知らないけど」

三森がはつと、僕の顔を見る。窓の外、三森の「うしろ」に広がる空はまだ明るいけれど、教室に差し込む光は昼間と違つて、ほんのすこし橙色を帯びている。

「ここにいたつて、なにも変わらなくな」?

今度は、返事がない。それが答えだつていうよに口をつぐんでから、三森はひとり」とみたいに言つた。

「私……ときどき、自分がどこにいればいいか、分からなくなる」と呼吸ぶんの間のあと、言葉を継ぐ。

「どこにいても、不安になるの。ここから私がいなくなつても、誰も気にしないんじやないかつて」

そのとき、教室のドアが派手な音を立てて開いた。体操服姿の西村が中に入つてきて、僕と三森の姿を認めるなり、大げさな声を上げる。

「うわっ、植本と三森じゃん」

そして大股で教室の後方にあるロッカーに向かい、ペットボトルホルダーを手に取つた。

「じめんじめん、邪魔したかなー」

にやにや笑いながら、品定めするよつた目を僕たちに向ける西村。その目つきが不快で、僕は思わず西村を睨みつけた。西村は素知らぬふりできびすを返して、教室を出ていつた。

ドアの向こうに消える西村の背中を見届けてから、三森に視線を戻す。

果然とドアのほうを見つめる三森の目には、はつせりと怯えの色が浮かんでいた。

静けさばかり際立つ教室で、僕はじつと三森の言葉を待つた。
だけど、三森はその日、最後まで口を閉ざしたままだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8834w/>

放課後の教室

2011年10月8日03時21分発行